

表 2 捕獲蚊数の比較(平成 30 年度)

調査地点	種別	性別	4月Ⅰ	4月Ⅱ	5月Ⅰ	5月Ⅱ	6月Ⅰ	6月Ⅱ	7月Ⅰ	7月Ⅱ	8月Ⅰ	8月Ⅱ	9月Ⅰ	9月Ⅱ	10月Ⅰ	10月Ⅱ	11月Ⅰ	11月Ⅱ	計	合計
地点A	ヒトスジシマカ	♂	0	0	0	10	1	77	25	24	6	3	6	31	21	11	0	0	215	600
		♀	0	0	0	15	7	23	58	80	25	44	31	46	28	16	4	1	378	
	アカイエカ群	♂	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2	1	4	
		♀	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3	
	その他	♂	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
		♀	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
地点B	ヒトスジシマカ	♂	0	0	11	15	11	22	2	11	21	3	4	101	100	23	1	1	326	1,874
		♀	0	0	15	24	18	89	19	168	126	78	182	293	272	236	24	3	1,547	
	アカイエカ群	♂	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	
		♀	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	その他	♂	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
		♀	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	

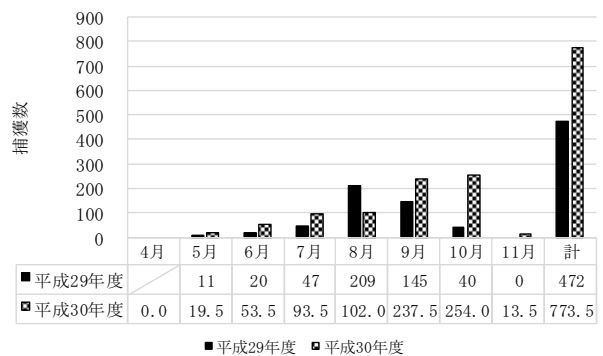
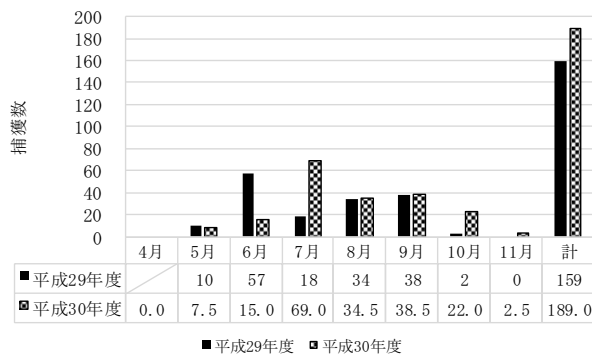


図 1 地点 A のヒトスジシマカ♀捕獲数(月別)

図 2 地点 B のヒトスジシマカ♀捕獲数(月別)

(2) オビトラップ

生活衛生センターにおける卵、ふ化殻及び幼虫の月別捕獲蚊数について表 3 に示した。集計については 1 週間ごとにオビトラップの卵、ふ化殻及び幼虫を計数し、その合計値を週数及びオビトラップの設置数である 5 で割ったものを 1 トラップの平均とした。

表 3 生活衛生センターにおけるオビトラップの捕獲蚊数(1 トラップ平均) (Mean±SE)

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	合計	
										中央値	最大値
卵 (1トラップ平均)	平成29年度		19.00±4.77	11.75±2.23	21.35±4.69	13.92±2.50	20.85±5.39	10.10±2.68	0.52±0.51	13.48±1.43	6.00
	平成30年度	0.00±0.00	12.12±3.44	12.20±2.21	25.05±5.10	35.00±8.63	17.55±3.16	2.56±0.83	0.05±0.05	13.36±1.77	152
ふ化殻 (1トラップ平均)	平成29年度		0.05±0.05	0.20±0.19	5.25±1.26	2.44±0.59	0.05±0.05	0.05±0.05	0.00±0.00	1.15±0.25	0.00
	平成30年度	0.00±0.00	0.08±0.08	0.10±0.07	1.40±0.46	1.20±0.70	3.95±2.21	0.00±0.00	0.00±0.00	0.81±0.29	43
幼虫 (1トラップ平均)	平成29年度		16.30±15.43	62.6±26.59	32.05±5.49	18.12±2.84	11.40±9.79	11.8±11.45	0.00±0.00	20.91±4.89	0.00
	平成30年度	0.00±0.00	60.00±29.99	61.50±18.82	27.10±9.55	13.00±4.12	8.45±3.31	0.00±0.00	0.00±0.00	21.52±5.30	644

4 考察

平成 30 年度はマスコミ等では猛暑の影響で蚊が少ないといわれていたが、今回の調査結果からはそのような傾向はみられなかった(表 1、表 2、図 1 及び図 2)。名古屋市の平均気温は平成 29 年度と比較し、平成 30 年度の夏季(7 月及び 8 月)は高温であったため、蚊が活動しにくかったと考えられる。しかし、地点 A については木陰等が多数あるため猛暑の影響が少なかったと推測され、その結果、平成 30 年度調査におけるヒトスジシマカ♀の 7 月及び 8 月の捕獲数は減少しなかったと考えられる。一方、木陰等の少ない地点 B では夏季の捕獲数の減少がみられたかわりに秋季(9 月及び 10 月)に捕獲数の増加がみられたが、気温が下がり蚊が活動しやすくなったためなどと考えられる。

猛暑の影響で水たまりが蒸発したり、水たまりができにくかったことなどにより幼虫の発生源が無くなり夏季の蚊の生息数が減少することも考えられたが、オビトラップの調査結果では産卵活動の低下は認められなかった(表 3)。水たまりが減少するような厳しい環境においても、蚊は産卵場所を見つけだし、生き残っているものと考えられる。

日本では今後ラグビーワールドカップやオリンピック、アジア競技大会等の国際的に大きいイベントが控えており、それに伴う外国人観光客のさらなる増加が見込まれるため蚊媒感染症が持ち込まれるリスクが年々高まっていることから今後も調査を続けていく必要があると考える。